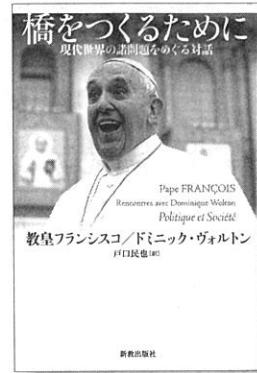


# BOOK

## ローマ教皇 来日の折に

批評家  
若松英輔



『橋をつくるために』  
教皇フランシスコ  
/ドミニック・ヴォルトン  
戸口民也 訳  
新教出版社 2,600円+税



『「真の喜び」に出会った人々』  
菊地 功 著  
オリエンズ宗教研究所  
1,200円+税

十一月下旬に教皇フランシスコが来日する。ローマ教皇の来日はじつに三十八年ぶりになる。彼は就任以来、大胆な改革によって世界の注目を集めてきた。教皇自身、可能な限り生活上の虚飾を廃することから始め、閉ざされた教会を開かれたものにし、キリスト者たちには、分断された社会に「橋をつくる」者となれと訴えた。

ここで取り上げる一冊は、フランス人ジャーナリストのドミニック・ヴォルトンとの対話によって生まれた。フランシスコの著作は少なくない。だが彼の場合、語られた言葉には、書かれたものとは別種のものがある。そのとき、その相手だからこそ生まれた言葉は、かえって多くの人に届く「いのち」を宿している。信仰を深めようとするとき、人は

気がつかないうちに、自分の殻に閉じこもる。だが、教皇は、信仰は人々の間で、それも和解を必要とする人々との間で深めよ、という。そうした行為を彼は、書名にもあるように「橋をつくる」という言葉で表現する。

この教皇は、かつてカトリック教会が苦しみを与えた、異教徒など、さまざまな人に謝罪することを活動の中心に据えている。

かつて「異端」と呼ばれたヴァルド派の人びとへの弾圧にふれ彼は、「死者も含めて、ひどいことをたくさんしました。謝罪すること。ときとして、謝罪すると、橋がつくられます」と語る。己れの誤りを認めること、終りのない彼の改革は、ここから始まったのである。

『「真の喜び」に出会った人々』の

著者・菊地功は、カトリック教会の東京大司教であり、日本の教会を牽引する人物のひとりである。大司教は、教皇が直接任命する。菊地はフランシスコによって選ばれた。

現教皇が強く訴えていることのひとつに貧困と難民問題の改善がある。教皇にとって「貧しい人」は、見て見ぬふりをする対象ではなく、むしろ、重大な何かを学ぶ対象であり、難民は拒絶する対象ではなく、共に生きて行く同朋にほかならない。

だが、弱き者とともにある教会という教皇の信念が、日本で語られることは多くない。貧困や難民の問題に直接かかわった経験を持ち、かつ独自の「哲学」をもつ人が多くないのがその理由だ。そうしたなかで菊地は、例外的な存在だといってよいだろう。

彼は、日本での宣教活動に入る前、およそ八年間、ガーナを中心にアフリカで過ごし、ひとたび帰国した後もルワンダ難民のキャンプに派遣され、ゲリラによる二時間の銃撃戦をも経験している。日本から遠く離れた場所で、疎外された人々と生きるなかで彼は、自身の霊性を深めていった。

この本で菊地が取り上げる人々の多くは、さまざまな試練のゆえにひとたび、語ることを奪われた者たちである。そうした虐待られた人の眼に世界の真相が映ることを彼はけっして見過ごさない。

本書は、現教皇の信仰を生きた形で引き継いだ一冊でもある。彼がいう「真の喜び」、教皇もいうようにそれは、神であるイエスに出会った者の喜びにはかならない。